様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2019
課題番号：２６３７０２９６

研究課題名（和文）近代英文学における日本の表象に関する実証的研究

研究課題名（英文）A Study of the Representation of Japan in Early Modern English Literature: Texts and Contexts

研究代表者
原田　範行（Harada, Noriyuki）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：９０２６５７７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：17世紀後半から18世紀初頭にかけてイギリスで刊行された定期刊行物や文学作品には、実際の交易が大幅に制限されていたにもかかわらず、きわめて多くの日本表象がある。それらの中には、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』やジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』のように、小説の発達、ひいては近代英文学史そのものの形成に深く関与した作品も含まれている。本研究は、こうした日本表象を網羅的・体系的に明らかにすることで当時のイギリス文化史における日本表象の重要性を確認するとともに、そうした日本表象が、散文フィクションの構築と近代英文学形成に果たした役割を明確にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は、第一に、特に市民社会の形成と海洋進出を特徴とする17世紀後半から18世紀初頭のイギリスにあって、従来看過されがちであった日本表象の持つ重要な意味を明らかにしたこと、第二に、そうした日本表象が当時の代表的な文学作品の作品世界を支えていることから、イギリス小説発達史における重要な意義を考察して示したこと、第三に、こうした日本表象の影響は、18世紀末までしばらく継続し、それがイギリスの対日観形成にも深く関わっていたことを確認したこと、そして第四に、いわゆる鎖国下におけるこうした日英交流の実態を明らかにすることで、世界における日本の位置を考える重要な視点を提供したこと、である。

研究成果の概要（英文）：In prose fictions, travel writings, and periodicals published in England from late seventeenth century to early eighteenth century, we can find numerous references to Japan, in spite of Japanese government's restriction of commerce and communication with England. In particular, references to Japan in Daniel Defoe's "Robinson Crusoe" (Part II) and Jonathan Swift's "Gulliver's Travels" are important in the context of the development of prose fiction and modern English literature. Based on a comprehensive and detailed researches on the representation of Japan at the time, this research funded by JSPS has shown the significance of those representation in the cultural context of England and also clarified the important role those representation in fictions and travel narratives played in the development of English prose fiction and, more widely, of modern English literature.

研究分野：近代英文学

キーワード：近代英文学　日本表象　好奇心（curiosity）　言説空間　実録　フィクション　旅行記　地図・絵本の東西交流

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

17 世紀から 18 世紀にかけての近代英文学は、イギリスの国際関係を反映して作品の舞台が世界各地に及んでおり、そうした諸地域に関する当時の一般的認識や地理的世界観に関する研究が不可欠である。なかでも日本については、いわゆる「鎖国」下でありながら、デフォーやスウィフトの著作をはじめ、多くの言及があり、『ガリヴァー旅行記』（1726）のように、日本表象が作品展開の枢要を担っている場合もある。精密なフィクションとして名高い、ジョージ・サルマナザールの『フォルモサ』（1704）も、きわめて多くの日本紹介（ただしフィクション）を含み、かつ、後の旅行記形式のイギリス文学作品に大きな影響を与えている。しかしながら、当時のイギリスにおける日本についての情報の実態、そしてそれに基づく作家の作品執筆の具体的経緯については、イギリスにおいても日本においても、驚くほど先行研究が少なかった。この分野の先駆的業績としては、島田孝右氏の書誌的研究である『日英交流史近世書誌年表』（2005）や『日本関連英語文献書誌 1555－1800』（2012）を挙げることができるが、これを基盤とした個別作家の作品創造過程に関する考察やイギリス文学史への影響についての分析、またそうした日本表象の淵源と想定される具体的な書物や地図、絵画作品などの特定には、なお多くの調査が必要とされる状況にある、というのが研究開始当初の状況であった。そこで本研究では、まず、とりわけ未解明な部分の多い 1660 年の王政復古以降、ケンペルの『日本誌』が刊行される 1727 年までの時期にイギリスで出版された文献に焦点を絞ることで研究の網羅性を確保しつつ、近代英文学における日本の表象を実証的に調査・研究することとした。

２．研究の目的

本研究は、主に次の三つを目的として開始された。

まず第一に、王政復古期以降の 17 世紀後半から 18 世紀初頭の 1727 年までを対象とし、その間に主にロンドンで刊行された英語文献に登場する日本の表象を詳細に分析し、その特徴を文化史的文脈に沿って体系的に整理するということである。先述の島田氏の書誌はこのための基礎資料となるものであり、書誌情報をさらに充実させることが必要であるが、それと同時に、近代英文学と日本の接点を明確にするには、書誌的記述にとどまっている各文献の日本への言及の内容と背景事情を詳細に吟味・分析し、それを文化史的文脈に基づいて整理することが必要である。

第二の目的は、第一の点で示された史料分析の成果をもとに、先に挙げたサルマナザール、デフォー、スウィフトの三人の個別作家の作品を中心に、近代英文学黎明期にあって、日本の表象がフィクション創造のプロセスにおいて果たしている機能を具体的に考察することである。この考察は、実録旅行記や伝記、逸話、社会風俗を記した定期刊行物の記事などと密接にかかわりながら誕生した後、瞬く間に近代英文学の重要な表現ジャンルとして確立するに至った近代小説の成立事情の研究にも重要な貢献をすることになる。こうした研究を実証的に進めるためには、当然のことながら、当時の文献をはじめ作家が具体的に手にしていた日本関係の文物を確認する必要がある。例えばスウィフトについては、現在、ドイツのミュンスター大学スウィフト研究所(Ehrenpreis Centre for Swift Studies）内において、スウィフト最晩年の蔵書がほぼ復元されているが、デフォーやサルマナザールについては没後の蔵書の一部の売り立て目録などが残るのみで、彼らが得ていた知識や情報を具体的に知る手がかりは不十分である。したがって本研究のこの第二の目的は、こうした作家の伝記的実証研究そのものにも資するものとなろう。実証的研究の精緻さを確保すべく、中心となる作家を三人に絞ったが、これは調査・研究対象を限定するという趣旨ではなく、個別作家の事例に関する考察を深めることで、日本表象の持つ性質や多様性を具体的に明らかにしたいとの考えによる。

第三の目的は、対象となる 17 世紀後半から 18 世紀初頭の時期に、オランダ東インド会社等を経由して日本や中国からイギリスないしはオランダに伝えられた文献、特に日本や中国の物語や地図、絵本類の伝播に関する基本的な状況を明らかにすることである。もちろんこうした物語や地図、絵本等には、第一の点で述べた書誌に収められた文献に記述が見られる場合もあるが、実際にはそれを上回る数の文献や地図、絵本がヨーロッパに伝わっていたと推定される。ライデン大学の日本文献コレクションなど、ヨーロッパ各地の文書館や図書館に現存する日本コレクションなどからもそのことは明らかであろう。これらの文献を近代英文学の作家たちが直ちに直接的に利用したとは考えにくいが、このような具体的な書物や地図の移動に伴うもろもろの言説が、作家のフィクション創造に多様な影響を与えたことは十分考えられよう。日本からイギリスへの文化的影響については、例えば 19 世紀末ジャポニスムなどがよく知られているが、例えば『ガリヴァー旅行記』などの描写を精査すると、この近代初期における日本からの影響が実質的なものであったことは明らかである。

上述の三点を主たる研究目的とする本研究が近代英文学研究全体に重要な影響をもたらすことは、少なくとも次の二つの点で明らかである。第一に、作家が手にしていた具体的な知識や情報の一端が明らかになることで、近代初期イギリスにおける地理的世界観の一部が明確になるということである。本研究では、研究の効果を高めるために、対象とする地域を日本に限定するが、当時の日本の表象の意味が明確になれば、それはイギリスの東アジア諸地域との関係や広くオリエンタリズムの源流を考察することにもつながるであろう。あるいは

また、文献をはじめとする具体的な文物の交流が、言説空間においてどのような形で物語化されていったのかという問題は、近代ジャーナリズムの誕生やいわゆる「公共圏」の特質を考える上でも重要な貢献となるに違いない。本研究が近代英文学研究全体に与える第二の重要な影響は、特に散文の発達と小説の誕生が重要な項目となる当時にあって、日本の扱いをめぐって、個別の作家の作品創造の経緯が具体的に明らかになる、という点である。このことは、散文で書かれたフィクションという小説の表現領域を措定する上で重要な知見を与えるものとなろう。すなわち、作品執筆における事実とフィクションの境界のあり方、その境界が作品の展開やプロットに与えた影響などを実証的に検証できるからである。

３．研究の方法

本研究の目的を実現するためには、少なくとも次の四つの課題について、しかるべき方法によって精緻かつ網羅的な資料調査と分析を遂行することが必要である。

第一に、対象となる時期の日本表象の書誌的事実の確認とその内容や出版状況の分析、さらにそうした分析の成果を当時の文化史的状況の中で理解し、位置づけることである。この作業に必要となるのは、基本的に、上述の島田氏の書誌的研究成果のほかに、日本国内の一部の大学図書館等でも利用可能な EEBO（Early English Books Online）や ECCO（Eighteenth-Century Collection Online）などの国際的データベースによる資料調査、ならびに欧米の有力な大学図書館や資料館の蔵書資料調査である。ただ、こうしたデータベース等による資料調査は、膨大な資料をわが国において扱うことが可能ではあるものの、個々の資料の性質や出版事情、文化史的背景を精査するためには、現物を調査する必要が生じる。作家や文人たちの原稿についてはこうしたデータベースを利用することはほとんど不可能であるし、データベースに収録されていない周辺的な印刷物（例えば、定期刊行物などに掲載された出版情報を示すチラシ類など）については、当然のことながら、イギリスの大英図書館を中心に現地での調査が不可欠である。

第二に、サルマナザール、デフォー、スウィフトという個別作家の作品執筆事情を詳細に把握し、その中で日本表象が有した意味を分析することである。実際、この三人の文人は、イギリス文学史上の重要作家として位置づけられてはいるものの、依然として不確かな部分が少なからずあって、特に本研究が対象とする日本表象との関連については、ほとんど調査・研究が進んでいない、というのが実情である。個別的に見て行くと、まずサルマナザールについては、基本的な伝記的記述さえ不確かなものが多く、原稿はもとより蔵書などについてもまったく知られていないため、彼の『フォルモサ』執筆経緯を明らかにするには、イギリスにおける公文書や教会保存文書調査などをおこなう必要がある。デフォーについては、その膨大な著作に関する校訂版全集は 21 世紀初頭に刊行されてはいるものの、例えば蔵書の概要について知る手段は、没後の売り立て目録一点のみと言ってよい。したがってこのデフォーについても、多くの作品研究があるものの、伝記的事実の解明にあたっては、本格的な現地調査が必要となる。スウィフトは、本研究の対象として絞った三人の中では最も伝記的調査が進んでいると言えるが、それでもなお、例えば、彼がウィリアム・テンプルの秘書を務めていた 1690 年代の行動には不明な部分が多く、また駐オランダイギリス大使を務めたこともあるこのテンプルの家で、スウィフトが親しんでいたであろうその蔵書類については、ほとんど知られていない。『ガリヴァー旅行記』における日本表象の淵源が、このテンプル家でのオランダ経由の情報にある可能性は高く、それゆえ、テンプル蔵書を含めた本格的な現地調査がやはり必要になる。

第三に、上述の第二の課題に関連して、それぞれの作家と作品が、同時代人にどのように評価され、また批判されていたのか、について、本格的な資料調査を行う必要がある。むろん、代表的な同時代評はすでに先行研究によって指摘されているのだが、問題は、同時代人にとってもいささか謎めいた存在であったと思われる日本表象が、相対的に見てどのような位置にあったのかを確認する必要がある、ということである。当時の定期刊行物や文人の書簡のみならず、例えば今日ではほとんど忘れられているものの、当時は一世を風靡した旅行記や地図類などを視野に入れて、総合的に検討を進めていく必要がある。イギリスおよびオランダの東インド会社関係の公文書類の調査も必要となろう。

そして第四に、17 世紀後半から 18 世紀初頭のイギリスにおける日本表象に具体的な形で影響を与えたと考えられる書物や地図、絵本は何か、日本から伝播し、イギリスを含めヨーロッパで比較的広く流布したと考えられるものは何か、ということを明らかにすることである。『坤輿万国全図』や『和漢三才図絵』などの可能性は、研究開始当初からすでにある程度想定することはできた。こうした地図や挿絵本には、例えば『ガリヴァー旅行記』に登場するリリパット（小人国）やブロブデヴィンナグ（大人国）を髣髴とさせる視覚表象があり、ヨーロッパ古典を含む素材研究の中でも、日本由来の可能性が指摘されてきたからである。だがそれらが、何らかの手段によって日本や中国から運び出され、ヨーロッパに持ち込まれて流布し、スウィフトの手元にまで及んでいたかどうかを確認するためには、貿易および社会的状況に関する包括的な調査が必要になる。イギリスでの現地調査には、こうした課題に関する取り組みも含まれることになる。

本研究は 5 年の研究期間を予定しておこなわれた。研究成果の総括にあてる最終年度を除き、上記の四つの課題をさらに細分化して各年度の研究課題として調査・研究を進めた。イギ

リスにおける現地調査は、毎年、夏季もしくは春季の休暇中を利用した。大型の国際的データベースについては、概ね、勤務先の大学図書館を利用したが、18 世紀当時の異版などで、本研究遂行に必要と考えられる図書資料については、本研究費により購入した。研究成果の公表にあたっては、英語および日本語の論文による発表と本研究成果をまとめて制作したホームページの公開という方法によった。本研究の成果発表と今後の展開を考える国際シンポジウムの開催を予定していたが、最終年度末に至って新型コロナウィルスの感染拡大という事態に見舞われたため、これについては他日を期すこととした。なお、本研究の成果を含む論文や著書の中には、2020 年度もしくは 2021 年度前半に刊行予定のものが含まれていることを付記しておく。

４．研究成果

本研究の主な成果をまとめると、次の六つの点に集約できる。それぞれについて、国内外の評価や今後の展望についても述べておきたい。

（1）17 世紀後半から 18 世紀初頭にかけてのイギリスにおける日本表象の書誌的事実を確認し、その文化史的背景について明らかにすることができたこと。本研究期間中に発表した英語および日本語の論文や口頭発表を通じて、この時期のイギリス文学・文化における日本表象の意味について、研究者間に一定の共通理解を持つことができ、今後のさらなる調査・研究の基礎になったと考えられる。また、本研究では、対象とする時期を 1660 年以降 1727 年までとしたが、1731 年から刊行が開始されたイギリスの代表的な定期刊行物の一つである『ジェントルマンズ・マガジン』などにおける日本表象についても、18 世紀末まで、ほぼ網羅的に確認することができたので、このことは、サミュエル・ジョンソンやオリヴァー・ゴールドスミス、トバイアス・スモレットといった、18 世紀後半の作家による日本への言及を今後検討する際に重要な基礎資料となろう。

（2）ジョージ・サルマナザールに関して、なお未解明の部分を残しつつも、従来の伝記的不明箇所の欠を補い、この作家に関する今後の国内外の研究の基礎を築くことができたこと。あわせてサルマナザールの主著である『フォルモサ』については邦訳が完成し、2021 年度前半には出版予定であることから、本作家および本作品の、わが国における受容と理解を促進することが期待できる。それはとりもなおさず、いわゆる「鎖国」下にあった日本が、イギリスにおいて、そして広くヨーロッパにあって形成していた日本観を明らかにするものであり、グローバル社会における日本のあり方や位置を考える重要な歴史的視座を提供することが期待される。

（3）ダニエル・デフォーについて、特に『ロビンソン・クルーソー』第 2 部および第 3 部における日本表象の意味を明らかにし、デフォー文学、ひいてはイギリス小説発達史における日本表象の意義を明確に示すことができたこと。このことは、多くの旅行記作品が出版されていた 18 世紀初頭のイギリスにあって、デフォーが、事実とフィクションのはざまを見事に描き分けていたその実態に迫る一つの重要な手がかりを与えるものであるのと同時に、デフォーが描いた（あるいは描かなかった）東南アジア島嶼地域や南アメリカに関する、デフォーおよび同時代人の当時の世界観を明らかにすることにもつながり、今後のデフォー研究に大きなインパクトを与えるものとなることが期待される。

（4）ジョナサン・スウィフトについて、特にその日本表象との接触を軸に、彼の伝記的事実の追加に貢献をしたこと。特に、1690 年代に彼が起居したウィリアム・テンプル家の蔵書調査は、従来のスウィフトの蔵書調査に関する成果を補うものであり、今後のさらなる調査・研究に資するものとなろう。また、『ガリヴァー旅行記』における日本表象の意義については、本研究期間中に発表した論文や口頭発表を通じて広く国内外で認知されるところとなった。特に、日本表象が、この作品のより本質的な創作事情にかかわるものであって、この作品における諷刺的記述の舞台設定に深く関係していたという点は、今後のスウィフト文学の研究に重要な視点を提供することが期待できよう。また、本研究で指摘した日本表象の意義は、作品中に登場するその他の地域、特にオーストラリア周辺や太平洋の島々についても、今後の調査・研究を促進するものと期待される。

（5）上記（4）に関連して、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』執筆に具体的な影響を与えた日本の文物の一つとして、『御伽草子』奈良絵本が考えられるということを示すことができた。本研究開始当初にあっては予想できなかった成果であるが、国内の国文学研究者の助力を得てなしえたものであり、この成果は今後広く、スウィフト研究や日英交流史において言及されることになろう。なおこの成果については、研究最終年度にあたる 2019 年 11 月に、国内の新聞等でも報道され、詳細にして広範なさらなる調査・研究が今後期待されるところである。

（6）本研究の対象とした時期は 1660 年から 1727 年であったが、これに連動して、二つの付随する成果がもたらされた。一つは、エンゲルベルト・ケンペルの『日本誌』（1727）出版に際して、これを英訳したイギリスの博物学者ハンス・スローン（その収集が、後に創設された大英博物館の基礎となった）とスウィフトとのダブリンでの交流の詳細が明らかになったことである。従来、両者の交流についてはほとんど明らかになっていなかったが、1720 年代、両者は、ダブリンの「園芸協会」などの会合で接触していた可能性があり、このスローン訳のケンペルの『日本誌』とスウィフトの『ガリヴァー旅行記』との関係を改めて検討する必要を指摘することができた。もう一つの付随する成果は、上記（1）においても触れたが、資料調

査の結果、18 世紀初頭のみならず、18 世紀後半までのイギリスにおける日本表象の実態がかなり明確になったことである。このことは、18 世紀初頭以降、19 世紀前半に至るまでのイギリスの中国・日本との外交関係の展開などにも重要な情報を与えることが期待される。特に、18 世紀末に乾隆帝治下の清朝を外交使節団として訪問し、日本渡航を希望していたものの果たせなかったジョージ・マカートニーなどが有した日本観などを検討する上でも重要な基礎資料を提供するものと思われる。

以上の成果については、本研究期間終了後も、本研究による成果であることを明記しつつ、論文や著作、口頭発表の形で発信を続けていきたい。本研究への助成に対して、改めて深甚なる謝意を表する次第である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Noriyuki Harada	４．巻 40
２．論文標題 Why Helen Burns Reading Rasselas?: A New Perspective on the Literary Legacy of the Eighteenth Century of the Brontes	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Colloqia	６．最初と最後の頁 2-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原田範行	４．巻 133
２．論文標題 ある新刊紹介者の孤独―イギリス小説の現在をめぐって	５．発行年 2018年
３．雑誌名 三田文学	６．最初と最後の頁 156－166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原田範行	４．巻 79
２．論文標題 ポカホンタスとイギリス近代	５．発行年 2018年
３．雑誌名 アメリカ文学	６．最初と最後の頁 31－38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原田範行	４．巻 6
２．論文標題 近代小説の誕生と日本表象―サルマナザール、デフォー、スウィフト	５．発行年 2018年
３．雑誌名 十八世紀イギリス文学研究	６．最初と最後の頁 2－22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 原田範行	4．巻 2018
2．論文標題 海外文学二〇一七年―イギリス文学	5．発行年 2018年
3．雑誌名 文藝年鑑	6．最初と最後の頁 66－68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 原田範行	4．巻 26
2．論文標題 「感受性」の小説作法―『パミラ』と『トリストラム・シャンディ』のある受容をめぐって	5．発行年 2017年
3．雑誌名 英国小説研究	6．最初と最後の頁 5-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 原田範行	4．巻 2016
2．論文標題 海外文学―イギリス文学	5．発行年 2016年
3．雑誌名 文藝年鑑	6．最初と最後の頁 125-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 原田範行	4．巻 1205
2．論文標題 秘められた東西交流	5．発行年 2016年
3．雑誌名 三田評論	6．最初と最後の頁 57-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Noriyuki Harada（原田範行）	4．巻 84
2．論文標題 Shakespeare's "Scenes of Enchantment" and Johnon's Criticism	5．発行年 2015年
3．雑誌名 Poetica: An international Journal of Linguistic-Literary Studies	6．最初と最後の頁 77-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Noriyuki Harada（原田範行）	4．巻 4-1
2．論文標題 Power in Modernization of Language and Literature in Eighteenth-century Britain and Modern Japan	5．発行年 2015年
3．雑誌名 The Iafor Journal of Literature and Librarianship	6．最初と最後の頁 20-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 原田範行	4．巻 5
2．論文標題 『パミラ』の空間表象の特質と18世紀英語散文の推移	5．発行年 2014年
3．雑誌名 十八世紀イギリス文学研究	6．最初と最後の頁 2-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Noriyuki Harada	4．巻 1
2．論文標題 Teaching Eighteenth-Century English Literature: Purposes, Curricula, and Syllabi	5．発行年 2014年
3．雑誌名 The Liberlit Journal of Teaching Literature	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 原田範行	4．巻 6
2．論文標題 言葉と映像の語るもの、語らぬもの―配置、省略、現実/非現実、展開の技法をめぐって	5．発行年 2014年
3．雑誌名 日本英文学会第86回大会・2013年度支部大会Proceedings	6．最初と最後の頁 159-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計27件（うち招待講演　18件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 Noriyuki Harada
2．発表標題 Eighteenth-Century Ocean Representations in Britain from George Psalmanazar's Formosa to James Cook's Journals
3．学会等名 An International Conference on the Aesthetic Mechanisms of Ocean Representations in British, American, and Asian Contexts（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Noriyuki Harada
2．発表標題 Difficulties, Approaches, and Tasks in Teaching the Long Eighteenth Century
3．学会等名 Liberlit 10（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 原田範行
2．発表標題 女性たちの太平洋往還と創作の磁場―ポカホンタス、ベーン、モル、ウィンクフィールド
3．学会等名 イギリス女性史学会
4．発表年 2019年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 文学のへそまがり―18世紀イギリスを舞台にして
３．学会等名 日本英文学会第90回特別シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Noriyuki Harada （原田範行）
２．発表標題 Orality, Writing, and Print Culture in the Eighteenth-Century England with Special Reference to Samuel Richardson and Samuel Johnson
３．学会等名 Writing Style: Samuel Johnson, Hugh Blair, Herbert Spencer, and Walter Pater（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 18世紀イギリス文学研究の過去・現在・未来―日本からの発信をめざして
３．学会等名 日本ジョンソン協会大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 実作者オースティンの誘惑―文体、描写、へそ曲がり
３．学会等名 日本オースティン協会大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 『ガリヴァー旅行記』の世界―視覚表象・諷刺・多義性
３．学会等名 奈良女子大学文学部講演会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 ポカホンタスのイギリス娘たち
３．学会等名 日本アメリカ文学会東京支部例会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 Literature and Reality in the Origin of the English Novel: Japan in the Writings of George Psalmanazar, Daniel Defoe, and Jonathan Swift
３．学会等名 Liberlit 2018（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 「教室の英文学」を考える
３．学会等名 日本英文学会関東支部第13回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 子どもの誕生とフィクションの変容―ディケンズにみる18世紀作家の方法的懐疑のゆくえ
３．学会等名 ディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季総会
４．発表年 2016年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 先人たちはシェイクスピアをどう読んできたか
３．学会等名 日本シェイクスピア協会第55回大会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 ジョンソンとヒューム―virtueとmoralのイギリス18世紀
３．学会等名 科研費「近代イギリスの女性たちの言語態と他者―感受性、制度、植民地」公開研究会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 『ガリヴァー旅行記』の楽しみ方―文学、絵画、映画、そして人間理解
３．学会等名 慶應義塾大学新入生歓迎講演会（招待講演）
４．発表年 2015年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 大学の抱える今日的問題と人文学的「知」の追究の狭間で―英文学会からの問いかけ
３．学会等名 日本英文学会第87回全国大会特別シンポジウム
４．発表年 2015年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 ギャスケルの「ジョンソン」―言語、語り、出版文化
３．学会等名 日本ギャスケル協会第27回例会（招待講演）
４．発表年 2015年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 徹底討議『ガリヴァー旅行記』の読みの可能性
３．学会等名 日本ジョンソン協会第48回全国大会シンポジウム
４．発表年 2015年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 ガリヴァーとアリス―言葉、諷刺、冒険の行方
３．学会等名 日本ルイス・キャロル協会第21回研究大会（招待講演）
４．発表年 2015年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 1890年代再考―ワイルド研究から見る＜英文学＞的動向
３．学会等名 日本オスカー・ワイルド協会第40回全国大会
４．発表年 2015年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 注釈から創造へ―『ガリヴァー旅行記』の場合
３．学会等名 テクスト研究学会第14回全国大会（招待講演）
４．発表年 2014年

１．発表者名 Noriyuki Harada
２．発表標題 Japan is a Fiction or Not?--Reconsideration of the References to Japan in Jonathan Swift's "Gulliver's Travels"
３．学会等名 English Studies Symposium at the University of Otago（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2014年

１．発表者名 Noriyuki Harada
２．発表標題 English Literary Education in Japan
３．学会等名 Bucknell Interdisciplinary Academic Symposium（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2014年

１．発表者名 Noriyuki Harada
２．発表標題 "Robinson Crusoe" in the Context of Travel Narrative of the Early Modern England /Asia
３．学会等名 Crusoe in Asia Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2014年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 英文学史的に考える近代小説の展開と韻文の推移
３．学会等名 日本英文学会北海道支部第59回大会（招待講演）
４．発表年 2014年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 英文学の社会貢献
３．学会等名 日本女子大学学術交流研究講演会（招待講演）
４．発表年 2015年

１．発表者名 原田範行
２．発表標題 古書愛好と文学愛好の今昔、東西―18世紀イギリスを淵源として
３．学会等名 慶應愛書家倶楽部2015年度第3回例会（招待講演）
４．発表年 2015年

〔図書〕　計10件

1．著者名 原田範行（今井久代、中野貴文、和田博文編）	4．発行年 2019年
2．出版社 笠間書院	5．総ページ数 454
3．書名 女学生とジェンダー―女性教養誌『むらさき』を鏡として	

1．著者名 坂本武（編）、原田範行、内田勝、落合一樹、久野陽一、木戸好信、武田将明、加藤正人、鈴木雅之、井石哲也	4．発行年 2018年
2．出版社 開文社出版	5．総ページ数 381
3．書名 ローレンス・スターンの世界	

1．著者名 富士川義之（編）、原田範行　他24名	4．発行年 2018年
2．出版社 金星堂	5．総ページ数 438
3．書名 ノンフィクションの英米文学	

1．著者名 原田範行、田中孝信、要田圭治、閑田朋子、侘美真理、本田蘭子、市川千恵子、川端康雄、武藤浩史	4．発行年 2016年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 416
3．書名 セクシュアリティとヴィクトリア朝文化	

1．著者名 木村正俊（編）原田範行、桃尾美佳、岩田美喜、高倉章男、宮崎かすみ、森川寿、佐藤容子、山崎弘行、坂内太、結城英雄、堀真理子、佐藤亨、岩上はる子、中尾まさみ、伊藤範子、西谷茉利子、三神弘子	4．発行年 2016年
2．出版社 春風社	5．総ページ数 460
3．書名 文学都市ダブリン	

1．著者名 Barnaby Ralph、Angela Kikue Davenport、Yui Nakatsuma（編）、Noriyuki Harada（原田範行）、Gerald Dickens、Toru Sasaki、James Tink、Miki Iwata、Masaaki Takeda、Neil Addison、Midori Niino、Yusuke Tanaka	4．発行年 2017年
2．出版社 Cambridge Scholars Publishing	5．総ページ数 156
3．書名 London and Literature, 1603-1901	

1．著者名 徳永聡子（編著）、原田範行、高宮利行、林望、折井善果、佐々木孝治、津田眞弓	4．発行年 2015年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 234
3．書名 出版文化史の東西―原本を読む楽しみ	

1．著者名 松田隆美（編）、原田範行、雪嶋宏一、不破有理、神崎忠昭、田代和生、木村三郎、吉永壮介	4．発行年 2015年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 246
3．書名 旅の書物 / 旅する書物	

１．著者名 原田範行	４．発行年 2015年
２．出版社 ＮＨＫ出版	５．総ページ数 157
３．書名 風刺文学の白眉―「ガリバー旅行記」の世界	

１．著者名 原田範行（編訳）	４．発行年 2015年
２．出版社 平凡社	５．総ページ数 293
３．書名 召使心得他四篇―スウィフト諷刺論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

その他、本研究に関する成果は、次のような媒体でも発表、活用された。
1. NHKカルチャーラジオ「文学の世界」：「『ガリバー旅行記』とその時代」（2015年1月～3月）。
2. 「ガリバーに御伽草子影響か―「小人の島」などに共通点」（共同通信経由で国内諸紙にて報道、2019年11月）
3. 本研究成果公開のためのホームページは「「近代英文学における日本の表象に関する実証的研究」報告―慶應義塾大学原田範行研究室へようこそ」で、URLは、次の通り。https://noriyuki/click

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考